



飯綱山 平沢利夫 画



第2831回会報

2022年(令和4年)4月5日(晴)

第2832回会報 観桜会

2022年(令和4年)4月12日(晴)

THE ROTARY CLUB OF NAGANO 長野ロータリークラブ

例会/毎週火曜日 12:30~13:30 ホテル国際21

事務局/長野市県町576 Tel.026-235-5493 Fax.026-235-4146

会長/中島克文 幹事/宮澤政徳 クラブ会報・雑誌委員/堀江三定

奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

- 司 会 : 志村友彦副SAA
- 点 鐘 : 中島克文会長
- ソング : 「君が代」「奉仕の理想」
- 会長挨拶 : 中島克文会長

コロナ禍で善光寺ご開帳が、4月3日から6月29日の88日間の日程で開催しています。とにかく無事に終わるように願っています。

今回は前回に引き続き長野駅前についてということで、統制時代そして戦後の困窮のお話をさせていただきます。

太平洋戦争の時代に入り、物資が不足するようになってからも、軍弁用の材料は特別に配給されました。その扱いは相当に厳しく、厨房まで軍人がついてきて監視する場面もあったそうです。当時、弁当作りの戦力となる若い者は、徴兵か軍需工場に徴用されていたため、厨房で働けるのはほとんどが高齢者。町内の人々が「お国のため」と、無償で手伝ってくださる行為に甘え、軍弁を間に合わせました。徹夜で弁当を作ったあと、わずかに残った焦げついたご飯を、軍の了承を得て握り飯にして食べて頂いたのが、労力奉仕のお礼だったと伝えています。しかし、当初は潤沢だった軍弁用の材料配給も次第にその量が減っていき、調達に困難にもかかわらず、下命された軍弁の供給に対応しなくてはなりません。全国的にそうだったようですが、弁当業者にとって受難の時代でした。昭和15年に入ると、配給される米が白米ではなく玄米となりました。軍用の米まで玄米になったかどうかは記録がないのでわかりません。ただ、一般の人々に向けた駅弁の営業は続けていたので、玄米をいかにおいしく炊くか、少ない米をいかに膨らませ、かさ上げするかが弁当店の大きな課題になりました。当店でも玄米の炊き方をあれこれ研究しました。当時、14世紀の武将・楠木正成の戦中食にちなんだ「楠公(なんこう炊き)炊き」「楠公飯(なんこうめし)」という玄米の炊き

方のリーフレットなどが配布され、それを参考に工夫するなど努力しましたが、おいしくするのは至難のわざだったようです。「楠公飯」は、大戦下の広島を舞台にしたアニメ映画「この世界の片隅に」にも登場し、いつか注目されたので、ご存じの方もいらっしゃると思います。余談になりますが、戦前戦中にかけて、楠木正成は「忠心愛国」の武将として、国威高揚のシンボルとなりました。南北朝の乱で後醍醐天皇を奉じ、勝ち目がないとわかっている戦にやむなく出陣し、後醍醐天皇のために命を落とします。その忠誠心と行為は文学や歌舞伎などでヒーローとして描かれ、人々を熱狂させる演目となりました。それが昭和の時代に「楠公」として再び登場し、国威高揚のための、今でいうキャラクターとなったと見られています。アニメでは、主人公が「楠公炊き」を試し、おいしくなかった様子が淡々と描かれますが、そこに控えめな風刺を感じ取った人もいたのではないのでしょうか。さて、玄米の供給量も目に見えて減っていた時代、各地の弁当業者は必死に生き残る道を探り、玄米に根菜を混ぜたり、米の代わりに麺類を短く切って入れたりした「代用食弁当」を販売しました。日本食糧新聞で紹介された記事(2017年12月13日)によれば、食料事情の悪化にともない、多くの人々が「駅に行けば何かが手に入る」と殺到した、とあります。中島も代用食弁当や、配給の粉で作ったパンを販売したりしましたが、駅へ持っていけばたちまち売り切れてしまい、あとは何も売るものがないというありさまでした。昭和20年8月15日、太平洋戦争の集結は人々の心に安堵をもたらしましたが、ここからが本当の困窮の始まりでした。当然ながら軍用弁当の発注がゼロになったため、すでに実質的に開店休業状態だった駅構内の立ち売りだけでは商売が立ち行きません。販売用の米の配給も一切なくなったので、わずかな配給の芋をふかして売ったり、茶巾絞りの菓子のようにして

販売しました。りんごの1個売りもしました。大根や干した大根葉に塩味をつけた程度のもを「野菜弁当」として販売することもありました。カボチャでもなんでも、入手できるものは工夫して売る日々でした。戦中の昭和20年5月に施行された「外食券引換制度」は、地方自治体が発行する「外食券」がないと食堂などで食事を購入することができないという制度で、「米穀通帳」を持って米の配給を受ける制度とあわせて施行されたもの。米の配給量を制限するための施策で、戦後も有効でした。この制度により、弁当の購入にも外食券が必要とされたことで、販売はますます販売が落ち込みました。当時、駅構内の業者は他の職業を兼ねることが許されなかったことから、営業は困難を極め、一時は駅の弁当販売を辞退することも考えたようです。たまたまその頃、駅の近くで「外食券食堂」を開業してほしいとの要望を県食糧課から受け、終戦後の昭和20年末、「中島弁当店食堂部」が誕生しました。外食券食堂は外食券を使える食堂で、その他の店では米飯の販売は許されませんでした。また、外食券食堂には限られた量ながら酒、砂糖、醤油、鮭の缶詰、魚などが配給されました。とはいえ、戦後間もなくの頃は配給もなく、氷水、練乳と砂糖で自家製造するアイスクリーム、ミルクティ、果物などを販売してしのぎました。また、祖父の友人の紹介で、明治乳業で出る脱脂粉乳をもらい受け、サッカリンで甘味をつけた飲み物を「パイラン」と名付けて駅のホームで販売し、喜ばれたそうです。脱脂粉乳は、牛乳から乳児用の粉乳を取ったあとの乳脂肪分の抜けたものを乾燥させたもの。明治乳業では捨てていましたが、脱脂のプロセスで発生するものを全て引き取るという条件で、脱脂粉乳を確保しました。今考えると、決しておいしいものではなかったでしょうが、当時は誰もが十分に食を得られずに飢えており、こんなものがずいぶんと喜ばれたそうです。それにしても米不足はいかんともしがたく、だからといって闇米で構内営業をするわけにはいきません。駅構内の業者で話し合い、新潟の生産者から撰米下、つまり米粒が砕けて、今では飼料や鳥の餌などにするくず米を共同買い付けして使用することにしました。主食管制の厳しいなか、県から「屑米購入移動証明書」を交付してもらい、いざ新潟へ。その実、屑米と称した普通米を貨車一杯分購入して帰るといふ、実に危ない橋でした。しかしこの米が、小諸、軽井沢、上田、諏訪、小淵沢、塩尻、松本、篠ノ井、そして長野の同業者の苦境をしのぐ助けになったのでした。

■新会員紹介： 中島克文会長

- ・山下貴司さん（中部電力パワーグリッド(株)長野支社長） 1964.9.15生
所属委員会…出席委員会
- ・牧田弘治さん（大和ハウス工業(株)長野支店支店

長） 1971.1.4生

所属委員会…広報・公共イメージ委員会

■新会員挨拶

- ・山下貴司さん…伝統あるロータリーに入会させて頂きまして光栄です。これから宜しくお願いします。
- ・牧田弘治さん…皆さんから色々教えて頂きたいと思います。これから何卒宜しくお願いします。

■次期地区役員・委員委嘱状

（桑澤ガバナー・上沢ガバナーエレクトより）

- ・小山紀雄さん…会員増強委員会委員

■アンケートのお願い： 関邦則戦略計画委員長

「長野ロータリークラブの将来ビジョン」を戦略計画と言っていますが、このアンケートを実施します。用意したものをお手元にお配りしました。こちらにご記入頂いてご回答下さい。4月28日までに、全員の皆さんのご提出をお願いします。名前を書く欄があって大変恐縮ですが、こちらからまたお聞きしたいことがある可能性がありますので、ご理解下さい。60周年が目の前にあり、その後も歩みを進めていく中で、クラブのことをぜひ前向きに捉えて頂き、建設的なご提案を頂いて、将来ビジョンを整理していきたいと考えています。提出はFAXで結構です。よろしくをお願いします。

■幹事報告： 宮澤政徳幹事

- ・ロータリーレート変更 1ドル=122円(4月)
- ・他クラブ例会変更…掲示板をご確認下さい。
- ・次年度の地区研修・協議会は、10日(日)にオンラインで開催される予定です。
- ・次週12日は観桜会です。ホテルメトロポリタン長野で12時に受付、12時半～13時半で開催されます。親睦委員会で盛り沢山のプログラムを考えています。出欠の確認ができていない方がいますので、事務局の方へご連絡をお願いします。
- ・5月8日、長野カントリークラブで長野市内6ロータリーゴルフコンペが開催されます。今10名ほどエントリーされていますが、もう4～5名エントリーして頂くとありがたいです。

■出席報告： 白岩裕之委員

- ・本日の出席人員 49名 ・無断欠席者数 10名
- ・出席率 44.1% ・前々回訂正出席率 81.4%

■ニコニコBOX報告： 柳澤政良委員

- ・お祝い会員 14名 ・早退ほか 3名
- ・お皿 22,000円

合計 118,500円 累計 1,766,000円

■会員卓話： 長野県信用農業協同組合連合会

代表理事専務 上 條 俊 夫 さん
「農業について思うこと」

JAグループは、市町村段階の組織と都道府県段階の組織と全国段階の組織の3段階の組織になって

います。市町村域のところに、組合員や地域の利用者の皆様を基盤とした、全部で14のJAが存在します。それぞれのJAが、信用事業や経営支援、購買販売事業、共済事業、厚生事業の主に5つの事業を行っており、それをサポートする県段階の組織、全国段階の組織が存在します。JAは、信用事業では貯金、貸出、為替の金融を行い、経営支援では農家の方の営農指導や農政活動、教育支援、購買販売事業では農業用生産資材の供給や農産物の販売、共済事業では生命共済を中心とした共済の提供、厚生事業では医療や福祉の関心の事業を行っています。信用の事業では、長野県信連が県段階の組織、農林中央金庫が全国段階の組織となっていて、JAの事業をサポートしています。具体的には、組合員さんからお預かりした貯金の大半が信連と農林中金に上がってくるので、それを運用させて頂いて、運用益をJAに還元してJAの事業に役立てて頂き、信用事業の企画や推進指導の部分でサポートしています。JAは幅広く事業を行っていますので、個々のJAの力だけでは不十分ですので、こうした県段階の組織、全国段階の組織がサポートする対応を取っています。

長野県は全国で4番目の面積で、南北に長く広い県域です。山々に囲まれているので中山間地域の多い土地条件で、農業にはそれほど適していませんが、県下各地で特色ある農業が行われており、生産額では全国でも上位に入ります。ここ数年は3千億以上の生産額を上げて安定的に推移しています。具体的には、米、野菜、果樹、きのこを中心に生産され、いずれも400億以上の生産額を上げていて、この4種類の作物で8割方を占めています。川上村のレタスや原村のセロリは全国1位の収穫量で、白菜、加工トマト、パセリ、アスパラガスは全国2位の生産量です。果物では、ネクタリン、プルーン、ブルーベリーが全国のトップシェアで、ブドウ、リンゴ、アンズは全国で2番目の収穫量です。果物は品種改良も進み、新たな種類のものも出てきました。その関係で生産量も伸びてきていて、リンゴではフジやシナノスイーツ、シナノゴールド、秋映が中心ですが、最近ではシナノリップという品種も出てきました。リンゴは秋の果物で、暑い夏が続くと果肉が柔らかくなったり色付きが悪くなったりしますが、シナノリップは夏に収穫でき、シャキッとした味わいで色合いも非常にいいです。ブドウはシャインマスカットが有名ですが、昨年辺りからクィーンルージュという品種が出てきました。糖度はシャインマスカットより更に高いです。花ではカーネーションやトルコキキョウ、アストロメリアの収穫量は長野県が1位、きのこではブナシメジやエノキダケ、エリンギが全国でもトップの生産を上げています。長野県の農業は、県独自の品種改良を重ねながら各地で特色ある生産を行って、いくつもの品目においてト

ップシェアを確保しています。輸出の関係では、最近ではアジアを中心に海外の所得が向上していて、日本の農産物に対する潜在的購買力がかなり増加してきています。加えて、インバウンドの方々が、コロナの前まではかなり日本に來られて



いて、日本の農産物を海外で広めて頂いたという環境変化もあり、輸出も随分伸びてきています。日本の農産物と食品関係の輸出額は、10年前には4500億程度でしたが、最近では1兆円を突破しました。政府では、2025年には2兆円、2030年には5兆円を目標にしています、まだまだ伸びそうです。長野県の農産物の輸出は、平成27年には4億円弱でしたが、令和2年には15億円弱に増えました。輸出先は台湾43.9%、香港43.5%、ほかにシンガポール、タイのアジアが中心です。輸出品は米やブドウ、市田柿、モモなどの果物が中心で、中でもブドウが65.3%です。輸出も期待が持てるようになってきて、長野県の農業は比較的前向きに捉えることができますが、一方で課題も沢山あります。1つは農業従事者の高齢化による担い手の不足です。日本は世界でも有数の少子高齢化社会で、多くの分野で人手不足の問題が出てきていますが、農業は比較的その影響を受けやすく、一段と深刻さを増しています。今ウクライナ・ロシア問題で食料問題が注目を浴びていますが、農業は本来、国民の最も根源的な必需品である食料を作り出す重要な産業であるにも関わらず、社会的な人手不足から厳しい状況に置かれています。こうした状況が続くと荒廃農地が拡大したり、農業が衰退していく懸念が出てきます。2000年には389万人だった農業就業人口が、2019年には168万人にまで減っています。65才以上の割合が年々増えてきており、2019年には70.2%まで増えています。一方で、若い人を中心に新規の就農者も増えてきてはいます。自ら経営の采配を振るうことができる、やり方次第で儲かるといった期待を抱いて就農する方もいますが、やってみると予想以上に重労働だったり、その割に報酬が少なかったりして、農業への期待と現実とのギャップから諦めざるを得ない人も実際はかなりいるので、就業人口の増加にはなかなか至りません。こうした課題を解決するために、最近話題性もあって注目を浴びている取り組みが2つあります。1つはスマート農業の展開です。伊那市では実証実験が行われており、県、大学、農機メーカー、営農集落法人の方々が、産・学・官の連携で取り組んでいるプロジェクトです。伊那市は山々に囲まれている中山間地域が多く、そうした土地柄の所でスマート農業を展開していくことを模索しながら進めています。

大勢の方が参加しており、関心の高さが伺えます。写真は、無人機のアグリロボットトラクターと有人トラクターを同時並行して農業をしている様子です。水田農業をスマート化して、作業の効率化や省力化を図りながら生産性を高める実証実験です。ほかにも、ドローンによる農薬散布や農業用ロボット等、最新の技術を活用しながらスマート農業を展開している取り組みは、いくつかあります。こうして担い手の不足の問題を解決していくのが1つのやり方です。もう1つ、農福連携の取り組みが注目されています。文字通り農業と福祉の連携で、農業の人手不足の解消と障がい者の方の働く機会の創出という、両者のニーズをうまくマッチングさせたものです。松本ハイランド農協の取り組み事例は、組合員の方々が、依頼したい作業をJAに依頼して、JAがそれを福祉事業所に情報提供をし、できそうな作業をマッチングさせ、福祉事業所と組合員との間で雇用契約を結んで作業をお手伝い頂くという仕組みです。加工用トマトの収穫作業では、事前に説明会を開いて農作業をして頂いています。この取り組みのいいところは、ただ単にお手伝い頂くことに留まらず、農協の直売所で「農福マルシェ」を開催し、産物の販売をやりながら、農家だけではなく地域住民に、農福連携の取り組みや、農業と福祉の連携をPRできることです。農家の人にとれば長時間労働の解消、障がい者にとれば働く機会の創出となり、それ以外にも、自立支援や社会参画といった面でも非常に役に立っていると思います。私の親戚も酪農をやっていて、障がい者の方に作業を手伝って頂いていますが、非常に働きっぷりがよく、牛とのコミュニケーションを楽しみにして来る方も多く、動物との触れ合いで安らぎを感じているのではないかと、という話も聞きます。ほかにも、コミュニケーションが取れるようになった、精神状態が安定したという話も聞こえてきます。農業と障がい者の方が同じ地域に住む者同士助け合っとうという考え方が根底にあって、お互いにウィンウィンの関係を築きながら成長でき、これからの農業のあり方を示してくれる、よい取り組みだと思えます。これらは、これからの農業の課題を解決していく取り組みですが、それに留まることなく、農業を核として、地域の企業や産業、福祉の分野と連携しながら進めていく取り組みですので、地方活性化に大きく貢献していくものだと思います。農業は色々な恵みを与えてくれます。美しい農村の風景は人々の心を和ませてくれますし、農村の持つコミュニティ力も都会では養えないもの、ましてやお金では買えないものです。そうした魅力が農業にはあって、世の中が殺伐になればなるほど、求められてくるものだと思います。そんな観点から農業をしてみることも必要だと感じています。

観桜会

ホテルメトロポリタン長野 3F 浅間
12:30~13:30 出席会員 59名

■司会：親睦活動・家族委員会橋本忍委員
■開会のごあいさつ：中島克文会長



■乾杯のご発声：小坂壮太郎副会長



■演舞：日本舞踊 藤間流
藤間千勢津様（演目1、4、6）
藤間寿勢津様（演目2、5、6）
藤間香勢津様（演目3、5、6）



1. からかさ



2. 京の四季



3. 潮来出島



4. 槍さび



5. 紅葉の橋



6. さわぎ

■締めのごあいさつ：滝沢捷司ガバナー補佐

